

第2回 旭川市民文化会館の在り方検討会 会議録（要旨）

会議名	第2回 旭川市民文化会館の在り方検討会
開催日	令和4年7月29日（金） 午後1時から午後2時30分まで
出席者 （敬称略）	参加者 全8名のうち7名出席 伊藤 誌麻，上田 信津子，佐藤 淳一，鈴木 雄太， 竹田 郁，南 裕一，森 傑 事務局 5名出席 社会教育部長，社会教育部次長，文化ホール担当課長， 市民文化会館長，市民文化会館主任
会議の公開非公開の別	公開
傍聴者数	1名
会議資料	別紙のとおり

1 開会

2 議事

進行役：

本日の議題は「大規模改修の事例について」であり，キーワードは「大規模改修」である。日本では1960～70年代の経済成長と人口増加により，1980年代以前に多くの公共施設が建設されたが，1981年に建築基準法が改正され，耐震性能の基準が大幅に変更となった。このため，1981年以前の建築物と以後の建築物とで，地震に対する強さが全く違うという状況にある。旭川市民文化会館は改正前の基準で建築されているため，今後も使い続けるためには，早急に耐震性能を高めていかなければいけないことが大きな課題の一つ。

そうした構造的な課題に加えて，現代的な感覚から見たときの使い勝手やバリアフリーといった，解決すべき機能的な課題がある。

本日は、今の建物をもし改修するとしたら、具体的にどのようなポイントが課題となり、どんなことが検討されるのか。実際に改修をするとしたら、どのようなスケジュールで、どの程度の費用がかかる等、過去の基本設計時に検討された内容を事務局から説明いただいた後、皆さんに、改修という選択肢が、どのように受け止められるかといった意見をいただけたらと思う。

では、本日の議事について、事務局より説明をお願いします。

事務局：

資料の「1」及び「2（1）～（2）」について説明

各参加者からの質問、意見等は特になし。

進行役：

補足として、東日本大震災により多数の避難者が発生したとき、体育館だけでは全ての避難者を収容できず、大規模な公共施設として、緊急時の電源や備蓄を有するホール等が避難先の候補となった。しかし、特定天井が落下していたために、避難所として使用することができなかった。直接、天井の落下により怪我をしたというケース以外にも、こうした事例が発生していた。

次に、資料の「2（3）～（6）」について、事務局より説明をお願いします。

事務局：

資料の「2（3）～（6）」に基づき説明

各参加者からの質問、意見等は特になし。

進行役：

補足として、現代の公共施設において、2階以上の建物にエレベーターを設けることは当然という感覚である。

また、前回の施設見学に際し、「ほとんどの施設で車椅子の利用者の方は、座席の場所が限られている。」という指摘があった。ユニバーサルデザインの大原則は、「個々人の特徴に関わらず、全ての方が同じ体験をできる、同じ機会を得られるようにする。」ということ。例えば、スロープ等でアクセスが確保されていても、一般の方がエントランスから入場するのに対し、車椅子利用者の方は、搬入口に駐車し、裏側から入ってくださいという形では、これを満たすとはいえない。当該基本設計において解決を図っているのは、あくまで車椅子席数の確保に限るものであり、車椅子利用者の方が自由な場所に座れるというところまでは、到達していない。このあたりが「改修」の難しさの一つである。

また、ホールという建物の計画・設計に際して、最重要項目として考えられるのがトイレである。ホールでは演奏の合間に挟まれる休憩時間など、一定の時間に一斉にトイレが利用されるため、瞬間的な最大値に合わせて設計する必要がある。当該基本設計では、女性用トイレの室数を改修前に比べ、倍増する設計をしている。一般的に女性の方が一人当たりの利用時間が長いため、女性用トイレを倍増させ、男性用トイレを半分かくらいに減らすという、現代の建築においては一般的な設計と言える。

トイレの洋式化に関しては、建設当時に基準としていた寸法が小さかったために、現代の水洗設備やベビーチェア等を入れると、到底収まりきらない。更に多目的トイレ等も整備するとなれば、トイレの総数が減ることもあり、難しい課題である。

搬入口整備について、そもそも屋外のスペースが狭過ぎるために、搬入口が拡大されても、搬入用トラックの取り回しに干渉する、あるいは入り切れないトラックが公道に溢れるといった事態が想定され、難しいところである。

都心部の公共性のオープンスペースの増床については、昨今の公共施設整備に関する考え方として、貸室等の利用者だけが利用できれば良いというのではなく、税金を投じて整備している公共施設であれば、無関係な目的で来ても、それなりに楽しんでいただける施設にしようというのが現代の潮流であり、それを目指すという改修内容と思われるが、非常に大がかりな施工内容となることが予想される。

加えて、単にスペースを開放したり、椅子やベンチを置いただけでは、人は滞留しない。例えば最近のホールでは、カフェやコンビニ等が併設されているなど、心地良く滞在できるような仕掛けが考えられている。階段で連続性を出すというのは良いアイデアであるが、それだけでは解消しきれない課題もある。

ここまでの補足内容も踏まえて、質問・意見等はないか。

なければ、資料の2「2（7）～（9）」について事務局より説明をお願いします。

事務局：

資料の「2（7）～（9）」に基づき説明

各参加者からの質問、意見等は特になし。

進行役：

遮音性については、単純に建設当時の建築材料や設備の性能と、現代の性能を比べると相当の違いがあり、現代において求められる防音・遮音性能を考えると限界があり、改修せざるを得ないなというところがあると思う。

和室の改修等にも関係する点として、最近、公共施設の諸室の考え方が変化している。人口が増加傾向にあり、財政的にも余裕があった頃は、ホールや学校、図書館といった公共施設がそれぞれ個別に必要な部屋数を設けていたが、人口も税収も減少傾向にある現代においては、例えば会議室であれば「市全体で会議室が何室程度あり、それぞれどの程度の利用率か。」というデータをもとに、公共施設の全体的な総量をいかに減らしていくかという考え方にシフトしている。

現在建設中の新庁舎にも会議室があり、職員だけでなく市民の利用も可能な形で貸し出すとした場合、全体として効率的に回すためには、どの程度の面積が必要かという考え方をもち、今の会議室の場所や使い勝手等を踏まえ、公共施設全体として、会議室というものをどう考え、マネジメントするかが重要になる。

また、旭川市民文化会館の展示室は、どちらかというとも美術館的な作りであるが、最近の中核市クラスの文化ホールでは、エントランスホールと一体的につながった空間で展示が行われており、来た人が立ち寄り、ついで見えていくような仕掛けが多くなってきている。これは、市民の文化芸術に触れる機会を高めようとする目的に加え、会議室と同様に、面積効率化を図る考えでもあり、中にはホールも催事で使用されていないときは開放し、市民が自由に過ごせる空間にするという施設もある。

最近では、専用の空間として整備するよりも、臨機応変に使い方を変えられる面積を増やすことで、「多様な使用が可能であるが、全体としてはコンパクトになる。」という設計の仕方が多い。当該基本設計における展示室は、展示機能や使い勝手は改善されると思われるが、この大きな面積が、市民の日常利用によっては有効に活用できるかという面では、部屋として閉じてしまうため、効率は上がらないという課題が想定される。

他に意見等がなければ、事務局から最後の3・4の説明と、本日欠席された参加者よりメールで意見の提示があったと聞いているので、紹介をお願いします。

事務局：

資料の「3」「4」に基づき説明

事務局：

本日欠席された参加者より、メールにて意見提示があったことから、その一部を紹介する。

ユニバーサルデザインに関して、車椅子利用者の方は、まず来館の過程が課題になる。例えば、本人が運転する自家用車で来館した際、駐車場の精算機操作や周辺駐車場が満車時の対応をどうするのか、公共交通機関で来館する際には、バス停までどのように移動するか等、利用者目線からすると、アクセスに関する課題は大きい。文化会館の整備検討に際しては、そうした課題を踏まえた検討が必要になるのではないかと。

現状の施設では、「利用者が施設に合わせて利用している。」というのが実状。改修項目の中で言えば、利用者が自分の意志で移動する上で、エレベーターの整備は必須となる。また、特にトイレに関しては、これまで改修後に意見を求められるといった機会が多かった。改修計画や図面の段階で車椅子利用者の方の意見を聞き、反映していくことで、より利用者にとって使いやすい施設ができると思う。

また、「心のバリアフリー対応」も重要である。専門窓口の設置が難しくても、利用者が安心して問合せできる窓口対応の整備も必要になると考えられる。

進行役：

では、今の意見も踏まえつつ、全体を通して各自一言ずつ、感想や意見を伺いたい。

参加者：

オープンスペースの項目があったが、単に場所を開放して「来てください」と言っても、人は来ない。進行役からの補足説明にあったカフェ等や、ストリートピアノを設置するなど、気軽に来館する仕組みを設けることが、催事等で来館するきっかけの一つになると思う。

もう一点感じたことは、動線の大切さ。旭川市民文化会館は、入口が少し狭く、暗いように感じる。例えばフランスのポンピドゥー・センターでは、オープンな広い前庭で日向ぼっこをしたり、中に入ってカフェを利用したり、外に出てお喋りをしたりなど日常的な利用の中で、「今夜コンサートがあるみたいだから行ってみよう。」といった自然な動線ができています。市民に対してもっと気軽な、ホール以外の部分での価値観が大切であると思う。

今回説明のあった大規模改修基本設計は素晴らしい内容であると思うが、その大部分が使用者（主催者）目線の改修内容である。市民の中には、文化会館を使用したことがない、あるいは見たことがないという方も多く、そうした方々は、約34億円もの費用をかけてこの内容を実施したとしても、効果を実感できないのではないかと。

そういった意味で、旭川市の一つのシンボルになるような形、カルチャーセンターとして、文化会館があって良かった、そこまで費用をかけて良かったという実感が得られるような、中身に限らず外側の改善であるとか、普段催事等で施設を利用しない方も含めた、市民の共有財産として価値を高める整備の在り方が大切であると思う。

搬入口の拡充に関しても、実際に使用した際、トラックの搬出入のために自車を出せなくなってしまうことがあった。2台のトラックが切り返せるようなことが大切かと思うが、現状の敷地を生かす改修では難しいと思われる。

会議室に関しても、ウェブ会議が主流となりつつある現状、いわゆる「会議室」が必要なのか疑問である。公民館の利用状況を見ると、会議室を使用してマルチな活動をされている方がとても多く、予約ですぐに埋まってしまう。そうした利用に係る補助施設の一つとして、文化会館も「会議室」と銘打つのでなく、もっとマルチなスペ

ースとして利用可能な整備の仕方と、名称にすると良いのでは。

進行役：

今の意見は、非常に重要なポイントであると思う。

建築的な視点からすると、ホールという建物は、病院や学校のように全員が使用する建物ではないため、全国的に整備の優先度が低いものとして扱われやすい。芸術系の建物は、今までのような造り方をすると、利用主体が特定の方に集中するにも関わらず、他の建物以上に整備費用がかかるとして、悪者にされがちである。

そうした事態を回避する意味もあり、ホールという施設は、「いかに一般の方が使えるようにしていくのか。」という視点をもって整備される時代になってきている。

参加者：

説明を聞き、平成 26 年度時点で検討されていた内容について、改めて理解した。

前回の会議後、文化会館の整備について周囲の市民に意見を聞いたところ、多くの方が「自分たちの世代よりも、次の世代の方が使いたいものを造ってほしい。」という意見であった。その他、ソフト面・ハード面・コスト面から多くの意見をいただき、他にも道内に優れた施設があるので、旭川らしい施設を造るための参考にすると良いのではないか、という話もあった。

また、費用面については、国からの補助金や、クラウドファンディング等のサポートが必要になると思う。

進行役：

費用については、設計当時において約 35 億円と積算されているが、参考まで、同程度の規模、同程度の面積のホールを現時点で造るとした場合、概算で 90 億円程度を要する。よって、大規模改修 35 億、新築 90 億というぐらいの感覚で金額を捉えていただければと思う。後々、意見が出ると思うが、これがコストパフォーマンスを考える上で一つの基準になる。

参加者：

コンクリートの耐用年数は 65 年という記載があった。その点から考えると、仮に大規模改修を実施した場合、20 年後にはどうなるのか。

進行役：

耐用年数という概念にはいくつか種類があり、65 年というのは物理的耐用年数を指す。鉄筋コンクリートとは、コンクリート塊の中に鉄筋という金属が入っている構造。金属を囲うコンクリートは当初アルカリ性であるが、年数の経過に伴い、表面から徐々に中性化していき、それが鉄筋部分まで到達すると、鉄筋が錆び始める。金属

が錆びると膨張するため、コンクリートが中から壊れる。これが、物理的に鉄筋コンクリート造の建物が寿命を迎える仕組みである。鉄筋とかぶっている厚さを「かぶり厚さ」と言うが、この厚さが設計上大体決まっており、この点から見たとき 65 年が目安になるということである。

これが物理的な耐用年数であるが、例えば先程の大規模修繕というのは、これは法的対象年数であり、法律上の基準が変われば、突然、改修等の必要が生じる場合もある。

法的・経済的な面での大きな話題として、日本の社会では、減価償却という概念がある。法律上、住宅や車など、年数の経過に伴い資産価値が下がっていく仕組みであるため、物理的耐用年数である 65 年よりも先に、法律の改正等、社会的事由に伴う耐用年数を迎える場合がある。

もう一点、大きなものが機能的耐用年数であり、これまで多数の指摘があったユニバーサルデザインに対応していないとか、現代の利用希望に対応できる機能をもっていないという点である。

このため、物理的な面では、65 年程度は使用可能であるが、法的規制の面で、耐震性能等が現行基準に満たないため、物理的耐用年数である 65 年を迎えるより前に、使用が難しいという状況になる。

参加者：

仮に今すぐ大規模改修を実施したとしても、20 年後には建替えの必要が生じ、90 億円程度の費用が発生する可能性があるということか。大規模改修は、「延命」ということか。

進行役：

指摘のとおりである。改修によって建物の寿命を延ばす方法も全くないわけではないが、非常に大がかりな工事となり、そこまで実施するのかという問題も出てくる。

耐震改修は、建物の強度は上昇するものの、寿命が伸びるものではない。仮に耐震改修を実施したとしても、改修後の建物を 50 年使えることにはならない。この点は非常に重要なポイントである。

参加者：

所属団体に文化会館を使用する際に、構成員から駐車場のことをよく言われる。団体には、30 代～90 代までの方が所属しているが、自力歩行が困難な 70 代の方が多くおり、普段は自分で車を運転するが、文化会館へ来る際は、他の人に運転してもらい、自分は昭和通で降り、運転手に車を駐車場に停めてもらっている。

また、今日は実際に自分で駐車場に車を止め、階段を上がって会議室まで来たが、主催者として荷物を持って来るとなると辛い。年齢に関わらず、エレベーターがある

と良いと思う。

整備費について、今後の人口増加を見込むことが難しい状況にあって、シニアの方々が楽しめるような、利用価値を高めるものであれば、投資しても良いと思う。

一方で、できるだけ少ない費用負担で使用できるということも利用価値の一つだと思うので、そうした配慮もあると良い。

進行役：

現代は、サービスさえしっかりしていれば、公共施設は、いくら赤字になっても良いという時代ではない。収益性の確保など、経営の視点はとても重要である。

また、市民が少ない負担で使用できるということも一方で確保しながら、いかに、他のニーズに応えるかという視点も、これからの公共施設には必要である。改修の結果、使い勝手が悪いとなれば、結果的に利用率が下がってしまうかもしれない。

参加者：

1年に1回、仙台以北を対象に大きな大会があるが、2,500人を収容できることが条件として規定されており、旭川では文化会館が候補となる。

過去に旭川で実施された際には、クリスタルホールも候補として検討したが、ホテルで会合した後、クリスタルホールまでの移動手段をどうするのかを考えた際に、やはり文化会館はとても利便性が良かった。

参加者：

大規模改修の検討会で出た意見をもとに、当該基本設計が作成されているが、やはり限界があることを感じる。

例えば、エントランスホールを市民の憩いの広場として開放したいという意見があり、それが改修項目として反映されているが、エントランスホールのトイレは増えておらず、トイレは、多目的トイレと展示室前の一箇所にしかない。

また搬入口の改善についても、検討段階ではもっと効率的に搬入等ができ、屋外の敷地も確保できるような構造が想定され、意見として挙がっていたが、何らかの理由があり、そうはなっていない。

加えて、基本設計当時は、市役所の整備方針が定まっていなかったため、隣接する以上、何かしらの連携が想定されており、文化会館は会議室よりもリハーサル室や楽屋の充実に努めれば良いものと考えていた。しかし、切り離された形で市役所を造り始めてしまった以上、文化会館としても、何らかの会議や打合せの部屋は必要になってきてしまう。

それ以外にも、大規模改修若しくは新築になったとしても、その途中で公会堂が改修から20年を迎えてしまう。大小ホールだけでなく、中ホールをどうするのかという点も、あわせて考えなければならないと思う。

また、駐車場について、ユニバーサルデザインや御年輩の利用者のことを考える必要がある、というのは理解できるが、一方で、例えば札幌市内のホールには、駐車場がない場所が多い。それはまちなかにあるから、元々利便性の良い場所に建てているためである。

ユニバーサルデザインとして、また隣接する市役所への来庁者用駐車場としては、一定程度の駐車場の整備が必要であると思うが、大ホール利用者が全員駐車できるような、1,500台規模の駐車場を整備するというのは、現実的に不可能である。

文化会館の立場としては、主催者側の駐車場整備に注力するなど、一定程度の割り切りが必要になると思う。

進行役：

隣の市役所を新しく建てながら、例えば改修・建替えるとしたら、この近隣でどうするのか、ということを考えてしまうと、なかなか難しい課題である。

融通が利く土地があるわけではないので、改修・建替えについて、他の施設との兼ね合いを考えたとき、どれ程のことができるかというのは、かなりハードルが上がるプロジェクトになるのではという感想である。

参加者：

役割という話が、しっくりきた。これまで文化会館だけのことで考えていたが、クリスタルホールや公会堂、CoCoDeなど、いろいろな場所との兼ね合いで、文化会館がどういう場所であるべきかという視点から考えるべきと改めて感じた。

「日常に開かれている場所であることが大事」という意見があったが、一方で日常的に市民が滞留する場所として整備するのか、非日常の場として、規模の大きな演劇や演奏会などの催事に主眼を置き整備するかで、空間の作り方ががらりと変わるのではないかと思う。両立は難しい課題であるが、実現することができれば、とても良い施設になるのではないかと思う。

進行役：

今の意見は、新しい施設を建てる際の検討において、とても重要な部分である。

既に単体の公共施設だけを考えるような時代ではないということと、もう一点、前回の会議でも触れたかもしれないが、このホールを誰に向けて設定するのか、ということを考えなければならない。世界中からイベントを呼ぶようなホールにするのか、それとも今以上に市民活動寄りにするのか、そうした部分で施設のスペックは全く変わってくる。これは本当に難しい課題であるが、それをしっかり考える時間、計画が必要であると思う。

参加者：

コンベンションの誘致支援を考えると、他の参加者の意見にもあったが、普段市民が使うときには、費用負担の小さい、良い施設で使いやすいものでも、MICE（※）で使用するときには、会議室はやはり必要である。

例えば2,000人以上の学会を誘致する場合、1,500人を収容する大ホールに加えて、分科会で15部屋程度は必要になる。このとき文化会館だけでは不足するが、不足すること自体が駄目なのではなく、周辺のホテル等と連携することができれば、民間への経済効果も生むことができる。

改修により、もし会議室が増えるのであれば、そうした大規模事業に際しては良いことであるが、面積の効率化、市内他施設とのバランス等を踏まえ、考えていく必要があるものと思う。

※MICE:企業等の会議(Meeting)、企業等の行う報奨・研修旅行(Incentive Travel)、国際機関・団体、学会等が行う国際会議(Convention)、展示会・見本市、イベント(Exhibition/Event)の頭文字のことであり、多くの集客交流が見込まれるビジネスイベントなどの総称を指す。

全く別の観点の話であるが、例えば1,000人規模の学会で、ランチミーティングを行いたいという希望が出てくる。現在、文化会館の大ホール内では飲食不可であるが、耐水性があって掃除しやすい椅子にする等の改修もあれば良いと思う。

また、前回も話をしたが、デザイン都市を謳っているので、旭川家具の部屋があるなど、魅力的で使いたくなるような施設であってほしい。

その上で、市民が使う際の負担は小さく、市外の団体等が使用する際には、きちんと収益を確保できるような使用料が設定されているとか、経済的にサステナブルな公共施設ということもテーマとして考え、デザインし、解決するというのを、旭川の強みにして、宣伝できたら良いと思う。

進行役：

旭川市民文化会館が造られた当初のコンセプト・やりたいことと、現在のものでは、随分と変わっていると思う。

仮に改修という選択肢を考えたとき、現在、あるいは将来の世代に必要とされるものに対して、改修という方法で、一体どこまで対応が可能なのかという部分が、判断の一つになるとともに、約35億円という金額について考える必要がある。

本日は、改修の情報を共有し、皆さんの理解を深めていただいた。

次回は建替えに関して、私が過去に携わった事案や、全国のホール関係の事業・事例を紹介し、その内容を踏まえて、今後の方向性について議論させていただきたい。

最後に、本日の会議の内容に関して、今後皆さんに検討いただく情報として、まとめておきたい。

先程の耐用年数の話も含めて、大規模改修という選択肢については、実施した場合、今のニーズ・将来のニーズにどれほど応えられるか、それに耐えうる性能向上になるのかというところが、一つのポイントになる。

耐用年数の面では、物理的には耐用可能であり、もう少し延命はできなくもないが、社会制度的には耐震性能という大きな課題が出てくるということと、建物の外側が既に決まっているため、会議室や展示室、そしてホールの性能といった、改修では解決し切れない課題が多数あり、機能的に耐え切れないところまで来ているということは、現実として受け止めなければならない。

そこでポイントになってくるのが費用対効果である。建替えの場合に発生する100億円近い整備費というのは、決して安いものではないので、どこの自治体も100億円近いホールをどうするか、という課題を抱えることになる。

先程補助金の話もあったが、ホール系というのはなかなか補助金を得るのが難しい。よって、自前の財政で約100億円をどうするかという話になってくるので、このあたりが一方での課題となる。

補足的に少し視点を変えて、最近では脱炭素やゼロカーボンという概念が話題になってきている。今ある建物を使い続けたほうが、地球には優しいのは確かであるが、このホールぐらいの規模の建物を新しく造るとなると、膨大なCO₂排出量になる。よって、使い続けられるものであれば、使い続けるにこしたことはないというのが、脱炭素・ゼロカーボンの基本的な考え方になる。

エコという観点で建物の話をすると、造る・壊すときの二酸化炭素の話と、建物自体を使い続けていくときに消費するエネルギーがもう一つの話になる。後者の使い続ける際に発生するエネルギーに関しては、新しい方が効果が大きく、メリットがある。一方で壊す・造るという点では、使い続ける方が地球にとっては良いというところで、このバランスをどう考えるのかというのが、現代において建物を造る際の検討事項になっている。

最後に、どんな建物の種類でも同じように考えられるかということ、そうではない。例えば、廃校は、用途転用して、用途を変えて使い続けることも多いが、これは学校という建物が、教室が並んで柱が均等にあり、他の用途に転用しやすい構造をしているためである。

そうした視点で考えると、仮に「壊すとCO₂が大量に排出されるので、ホールを壊さないようにしよう。何か別の用途に転用しよう。」と考えたとき、ホールは独特の造り方をするので、何の用途にも転用することができず、使い続けるのであれば、ホールとして使い続けなければならない。

このあたりのことも、先程の脱炭素の視点も含め、このホールという建物の特徴として、改修か、建替えかという判断に際して一つの視点になってくる。

本日の意見は事務局でまとめるが、次回の会議での新築の事例の資料も踏まえて、今回と次回の内容を合わせた意見交換を次回の資料の説明後に行いたいと思う。

3 閉会